

一週一詩 大雪 2

寒早十首

菅原道真（平安）

何人寒氣早  
寒早走還人  
案戸無新口  
尋名占旧身  
地毛郷土瘠  
天骨去来貧  
不以慈悲繫  
浮逃定可頻

何人寒氣早  
寒早浪来人  
欲避逋租客  
還為招責身  
鹿裘三尺弊  
蝸舎一間貧  
負子兼提婦  
行行乞予頻

（以下略）

【読み下し】

何れの人にか寒氣早き  
寒は早し走り還る人  
戸を案じても新口無し  
名を尋ねては旧身を占ふ  
地毛郷土瘠せたり  
天骨去来貧し  
慈悲を以て繫がざれば  
浮逃定めて頻ならむ

何れの人にか寒氣早き

寒は早し浪れ来れる人  
 避けまく欲りして租を逋（のが）るる客（たびびと）は  
 還りて責めを招く身となる  
 鹿の裘三尺の弊れ  
 蝸の舎一間の貧しさ  
 子を負ひ兼ねて婦を提ぐ  
 行く行く乞予頻なり

（以下略）

（川口久雄校注、日本古典文学大系 72：菅家文草 菅家後集、岩波書店、1966）

### 【あじわい】

クリスマスのイルミネーションが街を飾るようになると、寒さとともに貧しさがひとしお身にしみるといふひとがあるはずである。この詩は道真が国司として讃岐に赴任中に、そういうひとたちのことを詠んだもの。

詩は十首からなる。初めの二首のみを紹介した。十首とも、＜何れの人にか寒気早き＞で始まる。人、身、貧、頻の韻も共通。

＜何れの人にか寒気早き＞とは、寒さをまっさきに身にしみて感じるのはどういうひとたちだろうか、という意味である。それは、第1首では＜走り還る人＞、すなわち他国に逃亡して逃亡先から本籍地に送還されてきたひと、となる。第2首では、＜浪れ来れる人＞、すなわち他国から逃散してきたひと。以下、独り身の男、早くに父母を失ったひと、薬草園の労働者、運輸労働者、水手（かこ）、土地をもたない漁師、塩を売るひと、木こり、と続く。讃岐の国の特色も出ている。

第1首領聯の＜戸（こ）＞は戸籍。ひとりひとりに戸籍があり、それとともに納税義務を負う。現代顔負けの中央集権的管理がゆきとどいていたわけだが、律令施行後1世紀半がたって、ほころびもまたはつきりしてきた時代である。戸籍を捨てて逃散するもの、他国から逃散してやってくるものが後をたたなかったようである。

地方政府としては、前者によって税収が減ることになる分、後者をあらたに課税対象者とすることによってうめあわせをしていた。第2首領聯の＜還りて責めを招く身となる＞は、それを示唆している。頸聯の＜蝸舎一間＞は一間のあばら屋、尾聯の＜乞予（きよ）＞は与えること。子連れ夫婦が逃散してきてあばら屋を棲みかとしている。彼らに土地の百姓たちが食べ物を与えているのであ

る。

第 1 首尾聯の〈不以慈悲繫…〉は国司道真の政策を述べている。慈悲の政治を行わなければ浮浪逃散は減らない、というのである。彼は、自分の成果を認められることに汲々として人民を顧みないようなひとではなかったとみえる。貧しいひとたちの存在を知らないまま、そのうえに胡坐をかいて富貴を楽しむひとでもなかったようである。任国の貧困を十種類も数えあげることができたのであるから。

今日の政治家や官僚のなかに、貧困のなんたるかを知るひとがどれほどいることだろうか？